

〔研究ノート〕

## 「生活者の視点」を探る

—生社卒業論文の分析を中心とした多角的検証—

三井 恵里子

### 要旨

【目的】近年「生活者」「生活者の視点」という言葉が日常的に使われている。女性目線、消費者目線など、「誰か」の視点として使われることが多い。しかし、「どんな」視点かと問われると、明確に答えることは難しい。そこで、本研究では多角的検証を行い、「生活者の視点」という言葉の使われ方、今後の在り方を探る。

【方法】三方面から「生活者の視点」にアプローチする。第一に、福沢実学思想研究から規範的意味を探る。第二に、メディア（新聞）分析から通俗的意味を探る。第三に、「生活者の視点」を理念とする本大学生活社会科学講座の卒業論文の分析を行う。

【結果・考察】①「学問を生活者に広めた」と評価される福沢実学を、「学問で生活者を広めた」と解釈し、規範的生活者の起源を見出した。②メディア分析では、「生活者」「生活者の視点」の出現頻度と意味の変化を調べ、「生活者の視点」の6つの意味、二軸対立の構図、「マイノリティ憑依」の傾向を考察した。③卒業論文の分析では、生活領域の拡大と生活者像の多様化、社会調査の利用による潜在的な社会問題の焦点化がみられた。本講座において、通俗的生活者の問題点と規範的生活者の特徴が共にみられたことは、生活科学・生活社会科学の可能性を示唆している。生活者像は従来の家庭の代表者の枠を超え多様化しつつあり、もはや「誰か」の視点と捉えるのでは不十分である。自己防衛や目先の利益のために使用される例が増えた結果、期待感は薄れ、規範的意味との乖離が進んでいる。しかし本来、「生活者の視点」とは誰かに期待を託したり、要求するものでなく、生活者自身の質を問うものであった。今後の「生活者の視点」の指針として、様々な生活の場面に目を向け、生活者の感覚と社会全体を見渡して分析する感覚の両方を持ち、客観的に観察・検証する視点が求められる。

### はじめに

近年、「生活者」「生活者の視点」という言葉が世の中に普及し、日常的に使われる言葉となった。新聞では、国家予算の内訳を家計予算に例えて「生活者目線」を意識した工夫がなされたり、政治の世界では、政党の名前に生活と

いうフレーズを含むものも生まれてきて、盛んに生活者の目線の政策がアピールされるようになった。数十年前と比較すると、明らかに社会のあらゆるところで、生活者という言葉が見られるようになった。

現在出版されているいくつかの辞書では、生活者について明記されている。しかし、その辞

書の版を一つ廻り、5～10年程前の辞書を調べてみると、そこに生活者という項目は見当たらない<sup>1)</sup>。確かに、あえて定義するまでもなく、従来の使い方から考えて、「生活者」とは、女性、消費者、高齢者、主婦、市民等であるだろうと予測することはできる。では、「生活者の視点」とは彼らの視点ということなのだろうか。女性の視点、消費者の視点、高齢者の視点等、様々な言い方ができるが、それらは結局どのような視点で、何を意味するのか。

筆者は「一見すると、豊かで平和な暮らしに潜む様々なリスクや問題を生活者の視点から社会科学の方法を用いて解明」する、という理念を掲げた本講座で学んできて、常に気にかかってきたのが、この「生活者の視点」とは何かという問いであった。このような、「生活者の視点」は、ともすると鍵括弧をつけたまま、多くの人々が安易に、便利に使い、受け止めてしまう、あいまいな言葉になりかねないのではないだろうか。政党の掲げる「生活者の視点」に立った政策に、筆者がうさんくささを感じた原因の一つには、生活者の視点という意味が持つあいまいさが絡んでいるのではないか。

本研究では多角的検証を行い、その言葉を多用する現代社会の問題点、生活者の視点の性質、今後の在り方を検討していく。

これまで、「生活者の視点」ということについて、真正面から論じた研究者は非常に少なく、調べた中では、天野正子『「生活者」とはだれか』のただ一点を除いては、皆無と言っても過言ではない。天野は、著書の中で主に、生活者の活動史や思想家等の著書の研究を通して、生活者概念を模索している。文献研究が中心であるそれに対して、本研究の眼目は、実社会のデータおよび、本講座卒業生の執筆した卒業論文を基に、実証的に「生活者の視点」を検討しようとする点にある。

## 1. 研究の方針：多角的検証のイメージ

天野正子の『「生活者」とはだれか』によると、

戦時中から戦後にかけては、「生活者」という言葉は普及しておらず、高度経済成長期以降マスコミに登場し始めている。そして、現代では、生活者と言えば主婦、女性というイメージが根付いたように、「生活者のジェンダー化」が指摘されていた。

そこで、本研究のテーマである「生活者の視点」の要素を抽出するため、(天野, 1996)で紹介されている思想家、活動家らの事例を読んでいった。その結果、次のような考察ができた。

第一に、そもそも「生活者の視点」と呼べるものは存在するのだろうか。「生活者の視点」と言えば、ふつうに生活する人々が見ること、考えること全般を指し、それほど特別なものではない、という指摘もある。しかし、その「ふつうに生活する人々が見ること、考えること」に、ある一定の特徴があるとしたらどうだろう。それを「生活者の視点」と捉えて、本研究では追究しようとしている。その結果、筆者の感覚では、生活者の視点と呼べる特徴をもった見方、考え方があったと感じた。例えば、三木清や今和次郎、「思想の科学」運動は、それを探るための方法を考えている。三木は従来の職業的哲学者の思想でなく、生活者の思想を哲学しようとし、今は考現学や生活学を通して、生活を丸ごと研究対象にした。思想の科学はもともと生活者の思想を探究する方法を考えることを一つの目的として作られている。大衆芸術研究などは、文学作品や歌謡曲に投影された、人々の感じ方、考え方を探るための方法として考案されている。これらのことから、生活者の見方、考え方には、研究対象になりうるような一定の価値観が存在すると考えられる。

第二に、(天野, 1996)で紹介されている思想家、活動家らの共通点等を調べる中で、その一定の価値観の内容を探った。結果、その要素としては、①生活に本当に必要なものを見抜く、②当たり前の生活環境に疑いを持つ、ということが考えられた。さらに、生活者の視点の負の要素として、③生活の目先の利益に走りがち側面、が見えてきた。

天野の先行研究は、主に戦時期から1996年までを考察の対象にしており、また中心的な方法論としては文献研究が採用されている。そこで本研究では、三本の柱を立てた。(図1)

第一に、「生活者」の規範的意味を探るうえで、戦前に遡り、福沢実学思想研究を行った。福沢の提唱した実学は、近代学問の原型にもなっているため、一見すると学問の発展の話であるように見える。しかし、福沢がなぜ従来の実学と異なる新しい実学を提唱したのか。その背景には、彼の「生活者」像が垣間見える。その生活者像は、近代日本への過渡期であった当時の様子を反映したもので、近代的生活者のより根本的な要素が見えてくる。

第二に、通俗的使用法を探るうえで、実証研究を取り入れたメディア分析を行った。先行研究に出てきた研究者や活動家のように、意識が高い人ばかりではない。理念的、理想的な要素を抜きにして、実際に一般的な感覚では「生活者」「生活者の視点」という言葉はどのように扱われているのかを探っていく。

第三に、規範と通俗の使用法の間に位置するものとして、本講座卒業論文の分析を行った。事前調査として、まず、生活科学部と、人間生活学科における本講座の位置づけを学部改組に至る事情を明らかにする中で探った。全国的に生活科学というジャンルを設けたさきがけといえる本学で実際に当時の学部長として改組を手掛けた本田和子元学長にインタビューを行い、改組時の紛糾した議論の中に垣間見える各講座

の性質から、実際の学部、講座の位置づけがどうなっていたのか、また、改組時に議論された論点から、生活者の視点が内包している問題や性質を探った。その上で、1971年の家庭経営学科第一期生の論文から、2010年の生活社会科学講座卒業生までの、40年間1201本の論文のタイトルに基づくキーワード分析を行い、さらに、その一部については内容分析も行った。

## 2. 福沢実学にみる歴史的背景:規範的「生活者」

封建社会下では、伝統・因習の枠の中で生きる、つまり、受動的に「生活する人」が主体であった。それに対し、福沢は、『学問のすゝめ』において、その伝統・因習の枠自体を疑う術として、実学を提唱している。実学とは、①身近なあらゆる現象を、②客観的に観察・検証することを勧めたものであった。福沢はとにかく近代化ということについて考え、その方法として実学が出てきたというわけであり、生活者・生活者の視点ということについて考えようとしていたわけではない。しかし、福沢が実学を通して育成しようとした「日常生活を絶えず予測と計画に基づいて律し、試行錯誤 (trial and error) を通じて無限に新しき生活領域を開拓して行く奮闘的人間」<sup>2)</sup> という人物像は、理念的には天野の先行研究で見たような生活者像と一致する面があると思う。それは福沢が「生活者」と呼べるような人間を育成しようとしていたからではないだろうか。「生活する人」という意味の生活者は、封建社会においても当然存在していた。しかし、その時代に支配的な制度に対抗し、変革しようとする主体という意味での「生活者」はいなかったのかもしれない。封建社会においては、先天的に与えられた生活環境であるため、人々が理不尽さや疑問を感じる余地がなかった。福沢は、そのような状況の打開策として教育に力を入れ、人々にその生活、社会の理不尽さに気付かせようとした。さらに、そのすべとして、実験的精神(福沢が使った「実験」は、現代では経験、体験、実例の意)を根

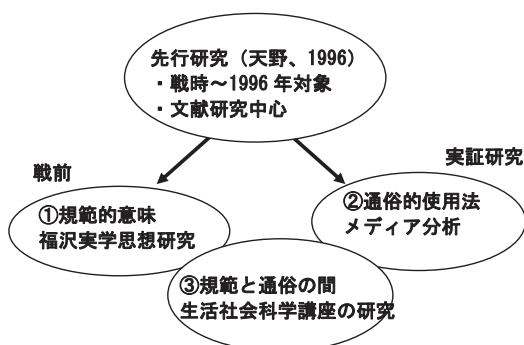


図1 本研究における多角的検証のイメージ

付かせようとした。

このように、現代では当たり前存在する「もの言う庶民」としての生活者が、封建社会から近代社会への移行過程の間で生まれたと考えると、一般的には「学問を生活者に広めた」という評価の福沢実学だが、「学問で生活者を広めた」という評価を付け加えることができるのではないだろうか。

以上の福沢実学からみた生活者の視点について、先に提示した「生活者の視点」の有する三要素と類似する点として、次のことが指摘できる。

第一に、福沢は、従来の支配的であった上下身分秩序をはじめとする封建社会の価値観に疑問を抱き、それを打破する手段として、学問を庶民にまで広めた。福沢の理念通りにいけば、生活者は、従来のように無批判に状況を受け入れるのではなく、考える手段を得たことになる。それは、先行研究の考察で挙げた「当り前の生活環境に疑いを持つ」という要素と合致する。

第二に、福沢は、社会的な制度や伝統を疑問を持たずに受け入れる人々に対し、それが本当に自己の生活環境を良くするものか、どのような働きを与えるのかを検証すべきであると考えた。そのように、人間生活に与える働きを検証し、それに基づいて評価しようとする姿勢は、先行研究の考察で挙げた「生活に必要なものを見抜く」という要素と類似している。

第三に、先行研究の考察において負の要素として挙げた、生活者というものは目先の利益に走りがちである側面は、福沢も指摘している。実は、福沢が実学を提唱する上で最も恐れていたことは、「あまりにも日常的なものへの学問の固着」<sup>3)</sup>である。そのため、福沢は晩年にある研究所の設立を構想しているのだが、そこでは人を利するかどうかを問わず、むしろ実利益に遠いものを研究テーマとして研究させることを提案していた。福沢は実利主義だと評されるが、実際に彼が見ていた「実利」というのが、卑近な日常生活の改善や有用性にはなかったことがわかる。個人が生活の必要性を吟味する場

合に、その視点を、生活の卑近な実利益に置くのか、あるいは将来を見据えた利益に置くのかでは、全く異なる結果になる。福沢が研究所の設立にあたって指摘したことは、「生活者の視点」について考える上で、重要な示唆を与えるものである。

### 3. 明治から現代の新聞分析

#### (1) 調査方法と内容

続いて、二本目の柱であるメディア分析として、明治から現代の新聞分析を行った。

各新聞社の提供しているデータベースを利用し、各年の「生活者」「生活者の視点」を含む記事数を集計し、グラフ化した。「生活者」の出現頻度として、1874年から1980年、1984年から2012年の136年分の推移を、また、「生活者の視点」の出現頻度として、1984年から2012年の29年間の推移を明らかにした。さらに、その一部については内容分析を行い、「生活者」の意味の変化、「生活者の視点」の意味に着目した。

#### (2) 出現頻度と意味の変化

図2が生活者、生活者の視点の出現頻度をグラフ化した結果である。朝日新聞と読売新聞という発行社の違いはあるものの、1870年代から2010年代までの長期間の動向を見ることで、「生活者」という言葉がいつごろから使われるようになり、どのような頻度で使われてきたのか、その全体的な傾向が明らかになった。大きく分けると、未使用期(1870～1910年)、導入期(1911～1980年)、普及期(1980～1990年前半)、安定期(1990～2000年)、減退期(2010～2012年)の5期間に分類することができた。「生活者の視点」に関しても概ね同様の傾向にある。

「生活者」という言葉が新聞で頻繁に見られ、社会で普及してきたのは、1980年代後半から1990年代の初めであった。この結果は、天野の先行研究とも一致する。天野は「日本社会が高度経済成長期をひたすら走っている頃には、生活者という言葉は、今ほど広範に聞くことはな

かった。「生活者」がひんぱんに用いられるようになるのは、1980年代末から90年代にかけての時代なのである<sup>4)</sup>と指摘している。この時期に急激に紙面においても出現頻度が高まっていた。1993年には年間約600件に達している。しかし、2010年から2012年にかけては減少傾向にあり、最盛期の約三分の一にまで減少し、記者や人々が何らかの理由で使用を控え始めた様子がかがえる。「生活者の視点」についても、おおむね同様の傾向を見せている。

また、「生活者」「生活者の視点」という言葉がどのような意味で使われているのか、記事の中で分類をしたところ、未使用期・導入期においては、生活という言葉はあったが、それも「生活が苦しい」「生活に余裕がある」という具合に、表現の力点は経済生活の側面に置かれていた。「生活者」は主に、路上生活者、単身生活者のように、単なる「生活する人」という、泥臭く、素朴な意味で使用されている。それに対し、普及期以降になると、「生活者の視点を忘れるな」

「生活者の視点に立て」というように、生活者や生活者の視点が「輝かしく素晴らしい」<sup>5)</sup>と感じさせる表現で使われるようになり、美化傾向が見られた。

### (3) 考察

#### 「生活者の視点」の6つの意味

「生活者の視点」の意味の分類として、①女性、②弱者、③当事者、④消費者、⑤個人、⑥市民感覚の6つに分類することができた。また、その他にも、記事を書いた人は、「社会のしがらみから外れ」た人々の視点、「社会悪がよく見え、鋭く問題提起できる」視点、分かりやすさ等の意味でそれを使っていた。「生活者の視点」は、このような様々な意味があり、非常にあいまいな言葉であるために、それらの視点を象徴するような人物の視点として書かれていた。先に挙げた6つの例は生活者の視点を持つ、代表的な人々として挙げられているのだと考えられる。

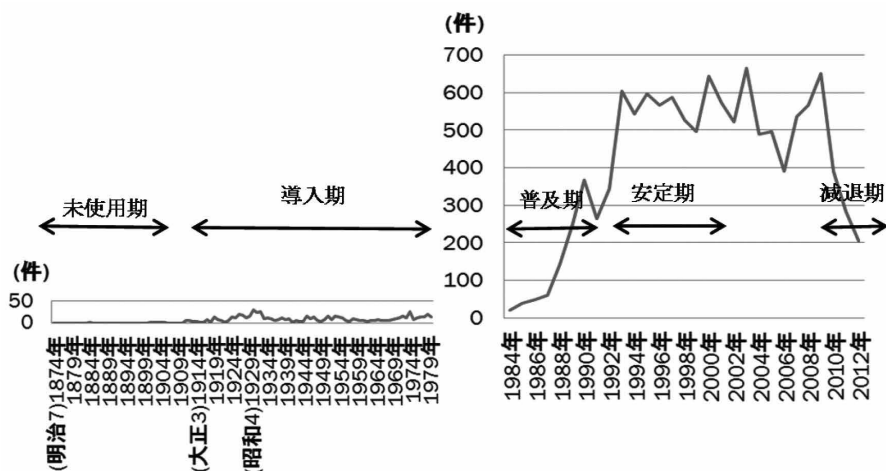


図2 「生活者」の出現頻度の推移

注 (1) 左の1980年以前のグラフについては、読売新聞社の発行した1874年から1980年までの記事の全文検索が可能な「明治・大正・昭和の読売新聞」データベースで「生活者」というキーワードについて年代ごとに数えた件数を基に、筆者作成。

(2) 右の1984年以降のグラフについては、朝日新聞社の発行した新聞の1984年8月以降の記事の全文検索が可能な「聞蔵Ⅱビジュアル」で年代ごとに「生活者」の使用された記事の数を数えた結果を基に、筆者作成。1984年以前については、朝日新聞のデータベースでは「朝日新聞戦前紙面データベース」(1926年～1945年)、「朝日新聞戦後見出しデータベース」(1945年～1999年)があるが、後者が見出し・キーワード検索のみで全文検索が利用不可のため、読売新聞の全文検索を利用した。

## 二項対立の構図

「生活者の視点」という言葉が利用される背景には、二項対立の構図が見出された。「生活者の視点」の背景には、批判する側としての生活者（消費者・個人・素人）に対して、批判される側としての生産者、企業、政府、政治家という二項対立の構図が見えてきた。これは、「生活者の視点」を考える上で重要な要素であると考えられる。現代社会においては、先に述べた福沢の時代のように、あからさまな上下身分秩序というものはないが、潜在的に存在する様々な秩序はやはりあると考えられる。生産者、企業、専門家側と、消費者、個人、素人側を比べると、やはり持つ情報量や置かれた立場において、完全に対等には成り得ないだろう。記事では、後者の人々が前者の人々に対し、「生活者の視点」を大切にしろ、と意見する場面が多くみられた。

そのような傾向がみられるのは1980年、90年代以降であり、それ以前ではあまりみられない。生活者という言葉が少しずつ使われ始めた1910年代から1930年代は、単なる「生活する人」という意味に過ぎない。日露戦争、太平洋戦争の戦前・戦間期の記事には、「野宿生活者」「船の上の子」などの文字が増え、社会全体が貧しい様子が伝わってくる。しかし、人々が「生活者の視線を」と言って、生活改善を強く訴えていくのは、そのような皆が貧しい貧困期ではない。むしろ一億総中流化社会<sup>6)</sup>を迎えた後のことである。中流化傾向は1970年頃から現在まで続いていて、2012年の調査では、「中」（「中の上」「中の中」「中の下」の合計）と答えた人は92.3%であった<sup>7)</sup>。実態はさておき、少なくとも意識の上では、多くの人々が中流の生活を送っていると感じていることが分かる。このことから、生活の貧困等は、人々が「生活者の視点」を訴える原因の一つかもしれないが、それが直接的な原因ではないと考えられる。総中流化意識の成立は、「労働者」「勤労者」という言葉が70年代以降に使用頻度が低下し、それと代わって「生活者」という言葉の使用頻度が上昇していくことと関連しているのかもしれない。

先行研究では80年代について、「家族単位から個人単位への個人主義的な私生活優先の価値観」が重視され、「趣味や嗜好の世界での交わりしか持たず、「私」や「仲間うち」という世界に自閉する「オタク化」現象」の広がりが指摘されている<sup>8)</sup>。しかし、記事をみると、「生活者」としての立場にいる人々の間に、ゆるやかな連帯感が存在するような印象を受ける。特に90年代以降は、批判される立場の生産者、企業、政府、政治家に対して、批判する「生活者」側の消費者、個人、素人という関係が生まれているようにみえた。

## マイノリティ憑依

人々が好んで「生活者」「生活者の視点」という言葉を利用する原因の一つとして、「マイノリティ憑依」が考えられる。

最近では、多くの人々が、弱者、女性、高齢者、障害者、消費者、市民、当事者等、様々な人の立場に立って、社会、政治の問題を指摘している記事が多い。それも、当事者自身による投稿だけでなく、それ以外の人が当事者の立場に寄り添って考え、共感し、行動しようとする様子が印象的である。62歳の男性は、自殺を考える20代の若者の多さを嘆き、「政党は弱者の視点を忘れるな」と訴えた。大阪府に住む女性は、沖縄の基地問題を扱った朗読劇を見て、「沖縄に関して教科書的知識に満足していたため、かえって無関心に陥っていたことを大いに恥じ」、沖縄を「私の問題」として考えていくことを決意している。（いずれも2012年の記事）

多くの人々が、意識の上では中流と感じるある程度豊かな生活を送る一方で、「生活者」として政府を批判したり、ものを考える。このような状況を、どのように解釈することができるか。一つの可能性として、佐々木俊尚が『「当事者」の時代』において指摘した「マイノリティ憑依」という現象が考えられる。マイノリティ憑依とは、一般的には、第三者が被害者の立場に憑依して、彼らと一緒に加害者を断罪する構図でつかわれる言葉であるが、ここでは、ある程度豊かな生活を送る中流生活者

が、社会的弱者の立場に憑依し、彼らと一緒に  
なって政府等を非難する傾向として見られた。

## 4. 卒業論文の研究

### (1) 経緯と方法

続いて、三本目の柱として、本講座卒業論文の分析に移る。研究の経緯だが、まず、本講座の性質は何か、と考えた場合、歴史を遡ると、家政学原論に辿り着いたことから、「生活者の視点」そのものを探究する性質があると仮定し、事前調査として、生活科学部改組当時の学部長である本田和子元学長にインタビューを行った。その結果、本講座では「生活者の視点」を意識して打ち出す一方で、完全な学問としての体系化には至っていない現状が明らかになってきた。そこから、本講座の学生がそのような教育の中で、生活者の視点の要素を受け取る可能性はゼロではないと考え、卒業論文の分析をする方針を立てた。

方法としては、まず、タイトルに基づくキーワード分析を行い、家庭経営学科第一期生が卒業した1971年（昭和46）から2010年（平成22）までの40年間に執筆された全1201本の卒業論文を分析し、その結果161のキーワードを抽出した。また、その一部、276本の論文<sup>9)</sup>については内容分析を行った。キーワード分析に当たっては、まずExcelで「No, 講座, 年度, 著者名, 論文タイトル, キーワード」の項目を立てた作業表を作成し、埋めていく。キーワードの部分には論文のタイトル中に用いられている単語を抜き出していく。その表に基づき、さらに年代ごとにそれぞれのキーワードがいくつあるのかを数え上げ、別表に集計していく。その際には、分析の為にキーワードを含む代表的な表現をすべて抜き出しておく。この作業を抜出した主なキーワードがなくなるまでくり返す。最後に40年間の合計の出現頻度の高い順にキーワードを並べ替える。また、内容分析に関しては一つの論文の内容記述を基に分析を行った。ここでは、各論文の調査方法と調査対象に注目し、

集計していった。調査・研究方法に関する記述を探る際には、まず目次に調査・研究方法についての項目があるかを確かめ、ある場合にはその頁を参考にした。項目を立てていない論文に関しては、附録として調査票をつけていたり、目次に調査・分析結果のページが設けられている等、調査を行っていることが明らかな場合には、本文中から記述を探して集計した。集計する際には、主な調査方法として、①調査票等による量的調査、②インタビュー・訪問・面接調査、③その他の方法という三つの方法に分類した。文献研究については、ほとんどの論文において行われていたため、あえて集計をせず、先にあげた三つの研究方法のいずれの方法も取っていないものが文献研究を中心に行っているものと判断した。また、その調査対象についても調べた。それぞれの論文の主な研究方法と対象を一覧表にまとめ、分析した。

### (2) 結果と考察

キーワード分析の結果、卒業論文における生活領域の拡大と生活者像の多様化が見られた。各論文のタイトルから抽出した161のキーワードそれぞれについて、使用頻度の多い順に並び替えた結果（1位から154位まで）、最も多く使用されていた単語は女性関連のキーワード（「女性・女子・女」）であり、137本の論文のタイトル中に見られた（表1）。この結果は一見すると、先行研究において指摘されていた「生活者のジェンダー化」を裏付ける結果であるように思われる。しかし、さらに詳しく生活主体、生活の場、ライフステージ別に分析した結果、近年では生活者像はむしろ女性以外の主体へと多様化し、生活領域も家庭から社会へと拡大する傾向にあった。（図3, 4 参考）生活主体を表すキーワードを分析したところ、近年、「家族」や「主婦」というキーワードに代わり、「企業」「行政」「自治体」や「障害者」「被害者」「ホームレス」のキーワードが増加していた。また、生活の場に関しては、「家庭」が減少し、「社会」「地域」が増加傾向にあった。これらの結果から、生活

の範囲が、家庭内から社会へと広がっていると考えることができる。80年代を通して「生活の質」が社会的なテーマになったことで、企業や

行政は家庭へ歩み寄り、家庭の問題は社会の問題へと拡散した。その結果、家庭と社会の境目なく、同じ一つの生活の場として議論する新たな

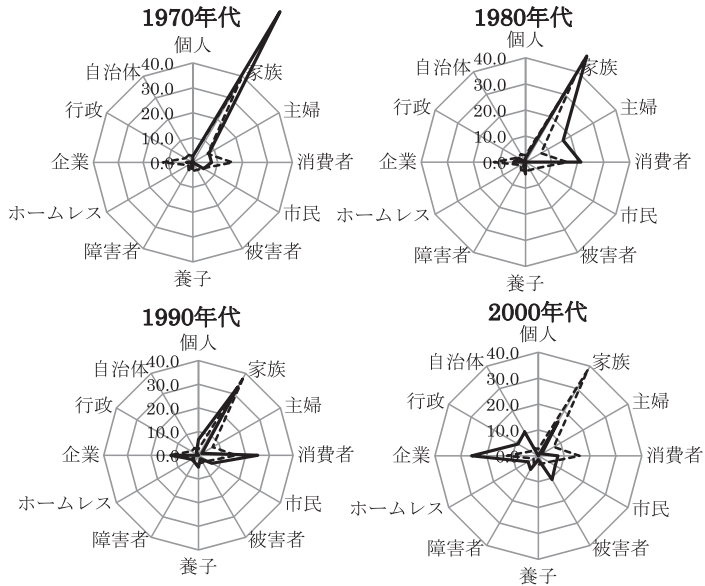


図3 生活主体を表すキーワードの年代別構成比のレーダーチャート

注) 実線は各年代の年代別構成比を示す。点線は全期間の構成比を示す。1970年代は家族、80年代は主婦と消費者、90年代は消費者、2000年代は企業、行政、自治体や障害者、被害者、ホームレスといったマイノリティへと、主に扱われる生活主体が移り変わっていく様子が分かる。

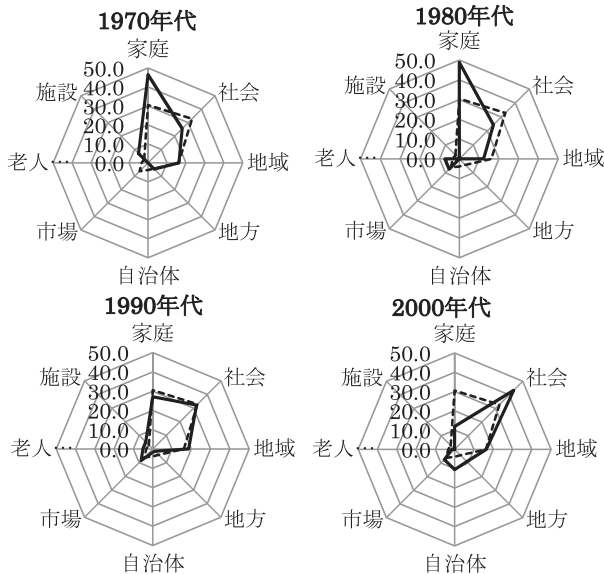


図4 生活の場を表すキーワードの年代別構成比のレーダーチャート

注) 実線は各年代の年代別構成比を示す。点線は全期間の構成比を示す。1970年代に多かった家庭から徐々に2000年にかけて社会へとシフトしていく様子がうかがえる。また、微かではあるが、地域、地方、自治体の項目に膨らみがあることが確認できる。



表 1 キーワード分析結果の一例

頻出 順位	キーワード	代表的な表現 (語の並びは出てきた順)	1970	1980	1990	2000年代	合計
			年代	年代	年代	(2010年)	
1	女性・女子・女	<p>(女性)女性解放、「女性の解放」、高学歴女性、農村女性、現代既婚女性、離島女性、インドゥー女性、女性論、女性像、日米女性、女性、タイの女性、既婚就労女性、既婚女性、働く女性、女性生活、アジア女性、女性労働、女性管理職、女性トラックドライバー、単身女性、女性雑誌、男女共同参画、女性総合職、大卒女性、女性センター、女性専用車両、女性活用戦略、来日女性、女性議員、現代女性、同棲経験女性、ひとりっこ女性、子育て女性、女性参画、理想の女性、中国人女性</p> <p>(女子)女子労働、女子学生、女子高等教育、女子労働力率、女子高校生、女子労働市場、既婚女子雇用者、お茶の水女子大学、底辺民衆女子、女子雇用政策、女子大生、女子大学、男女共学制、女子教育思想、女子非行</p> <p>(女)「女学雑誌」、「女大生」観、男女差、製糸工女、女世帯、男女の対、男女雇用機会均等法、「婦女新聞」、男女、女講師、女心、男女格差、女の連帯、女流能楽師、男女賃金格差、男女関係、男女共同参画</p>	16	39	43	39	137
2	生活	<p>生活費、人間生活、人々の生活、一人暮らし老人の生活構造、生活水準の概念、最低生活費、結婚生活調査、「結婚生活実態調査」、最底辺にいる人々の生活、年齢別こみた生活費、経済生活、製糸工女の生活実態、食生活、消費生活水準、生活水準、老後の生活適応、生活空間、国民生活、現代生活、「家庭生活調査」、生活時間、老人の生活水準、生活規範、ヤマギシズム生活、主婦の生活形態、住生活、生活実化、独身勤労者の生活費構造、離島女性の生活実動、生活基盤、生活行動様式、余暇生活、生活推移、漁村老人の生活構造、家庭生活、定年後夫婦の生活実化、中高年者の生活、生活意識、一人暮らし老人の生活、日米女性の生活、生活連関、生活史、精神生活、男性勤労者の生活、層と生活、戦時戦後の窮乏生活、家庭生活満足度、女性と子どもの生活時間、生活レベルの変化、生活環境刺激、大学生の食生活、和洋折衷の住生活史、都市労働者家族の生活実態、生活環境、職業生活、女性生活、老後の生活費、食生活の変化、生活の知恵、ハヤシヨウ生活、大企業族の生活、生活ストレス、中国の余暇生活、若者の生活行動、大山寮生の生活、生活設計、現代高校生の消費生活、農村高齢者の生活、ホームレスに対する生活保護、生活空間、離婚後の女性の生活保障、生活者、結婚生活観、老後の生活保障、第三期の女性の生活、中学生の食生活、リスクと生活設計、生活環境主義、高齢者の生活満足度、障害者の自立生活、生活者ニーズ、生活者の肖像問題、子どもが家を離れた時の母親の生活の変化、花森安治の生活思想、中高生の生活空間・生活時間、若者が宮むシエラ生活</p>	31	31	38	15	115
3	日本・わが国	<p>(日本)日本老人、日本民法、日本文化、現代日本、日本人、日本的なもの、日本文学、日本的雇用慣行、日本的雇用管理システム、日本的流通機構、日本的経営、日本人観、日本ホームレス、日本型付加価値税、近代日本、日本企業、日本国籍、日本社会、日本一、日本人意識、日本プロ野球、日本イメージ、戦後日本、在日本人</p> <p>(わが国)わが国の税制、わが国の高貯蓄、わが国における夫婦の勢力関係、わが国におけるヒーブ</p>	21	22	33	37	113
4	家族	<p>欠損家族、家族研究、家族統制、出生家族、創設家族、家族像、古代家族、家族紐帯、家族病理、家族関係、家族制度、家族意識、イタリア家族法、家族問題、家族構成、患者家族、フランスの家族、共働き家族、農業家族、高齢者を支える家族、家族論、農村三世代家族、自営業家族、家族観、デイケア利用家族、都市労働者家族、家族形態、家族間、近代家族像、家族単位、家族的要因、伝統的家族意識、</p>	28	31	20	10	89

な傾向が生まれたと考えられる。これらは、あくまで卒業論文にみられた傾向ではあるが、卒業論文が時代の流行を敏感に反映している様子を示す結果があったことから、講座に現れた傾向を、社会の一つの傾向として考えてみる価値はあるだろう。その場合、社会において、生活者はもはや家庭の代表者を意味する言葉ではなく、社会に生きる人すべてを表す言葉になったと指摘できる。

社会に生きる人すべてが生活者であるならば、生活者の視点と言った場合、その意味は多様である。一体、誰の視点を意味するのか、非常にあいまいな概念になってしまう。だからこそ、誰かの視点ではなく、その要素を特定することが現代社会では必要になるだろう。

さらに、内容分析の結果からは、調査方法と対象の特徴が明らかになった。社会調査の手法で調査を実施した論文が非常に多い。図5を見ると、右肩上がりに調査利用論文の割合が上昇していることが分かる。また、その調査の対象となっているのは、一般人ではあるが、その時々

れてしまった人々、例えば、家庭的趣味を持つ男性や、セクシャルマイノリティなどの人々に焦点を当てることで、潜在的な社会問題を焦点化させる効果が感じられた。ただし、その一方で、それが単なるマイノリティ憑依と異なるのかどうかは、ここからは判断しきれなかった。

以上のように、①生活を広く捉え、②社会調査の手法で、③潜在的な社会問題に切り込む本講座の学問方法は、ある一面において福沢実学に類似していると考えることができる。

## むすび

### 三分析の関連と意義

以上のように、「生活者の視点」について三つの方面から分析してきた。その結果、福沢実学研究で明らかになった規範的生活者の特徴（①あらゆる身近な現象を対象とし、②客観的に観察・検証、③固定的権威等を疑う）と、メディア分析によって明らかになった通俗的生活者の特徴（①マイノリティ憑依、②目先の利益、③専門家との二軸対立）の両方が、本講座の分

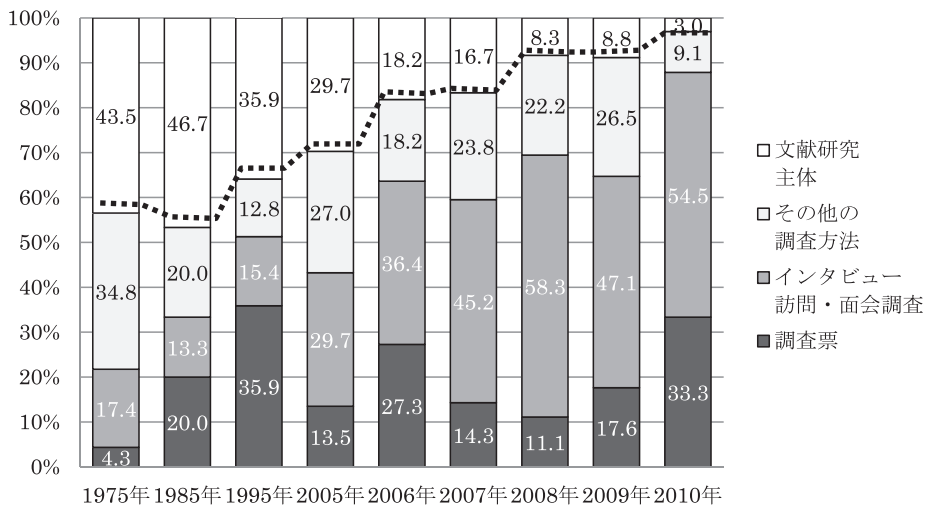


図5 卒業論文における各調査方法の利用割合の推移 (%)

注) 1975年、1985年、1995年、2005年、2006年、2007年、2008年、2009年、2010年の9年間、276本の家庭経営学科・生活社会科学講座の卒業論文を対象とし、各研究方法をとる。論文数と割合を求めたもの。各年の合計を100とした場合の各方法の割合を求めている。「その他の調査方法」とは、調査票、インタビュー等以外の方法で行われた調査で、具体的には、裁判事例の分析、家計調査年報の分析、既存の調査を独自に分析しなおしたものを、新聞・雑誌・手記・文学作品の分析、観察、フィールド調査等がみられた。

析においてみられた（図6）。福沢実学のみでは現実離れ，メディア分析のみでは理念不足になりがちであるが，本講座の分析が他二つの分析の連結点となり，過去・現在，通俗・規範という二軸の要素を立体的に考察することが可能となった。

### 提言

本講座において，規範的生活者の特徴がみられたことは，生活科学，生活社会科学の大学教育における新たな可能性を示唆していると考えられる。「生活者の視点」に立った教育の要は，学びの枠組みや方法を身につけることにあるのではないだろうか。それらを身につけることで，「学び」を教育の世界から日常へ持ち込むことが可能になる。福沢実学の意義もそこにあったのだと考える。現代社会において，学びの枠組みや方法を教える教育が実現すれば，従来の知識偏重の大学教育の枠を超え，教育は「生活者」の生き方を左右するものとなる。そこで，大学の役割を再考する必要が生じる。そのきっかけとして，従来の教育体系に当てはまらない，一部の学生がアレルギーをおこす程度に異質で，かつ学問として未完成の状態である生活社会科学は最良ではないか。

広く学ぶ（社会科学）ことで，学生の頭の中に複数の枠組みができ，社会調査の手法を利用することで，社会の固定的枠組み（例：ジェンダー規範）に疑いを持つ手段を得ることになる。それらの特徴を突き詰め，大学教育の中で位置

づけることができれば，現代版実学とでもいうような，「生活者の視点」を専門的に扱う学問としての道が開けると考える。ただし，広く学ぶ教養教育に関しては，学力の低下，専門性の欠如などの弊害も指摘される。しかし，それはいまだに教育が学校の中で完結しているからこそ生じる問題なのではないか。教養教育では，学校で様々な枠組みを与え，その枠の中には，生活者自身が学校から日常へ出た際にも，自ら埋めていく自助努力が求められる。教育現場もそれを想定した教育が求められるだろう。

### 結論

最後に，改めて生活者の視点とは何か，と考えた場合，始めに問題提起したような女性目線，消費者目線，弱者目線のような「誰か」の目線は，「生活者の視点」のほんの一面に過ぎないといえる。近年，自己防衛や目先の利益のために使用される例が増えたことで，一時みられた期待感は薄れ，福沢実学に見出した規範的意味との乖離が進んでいる。しかし，本来「生活者の視点」とは，誰かに期待を託したり，要求するものではなく，生活者自身の質を問うものであった。

今後の「生活者の視点」の指針として，様々な生活の場面に目を向け，生活者の感覚と社会全体を見渡して分析する感覚の両方を持ち，客観的に観察・検証しようとする視点が求められる。

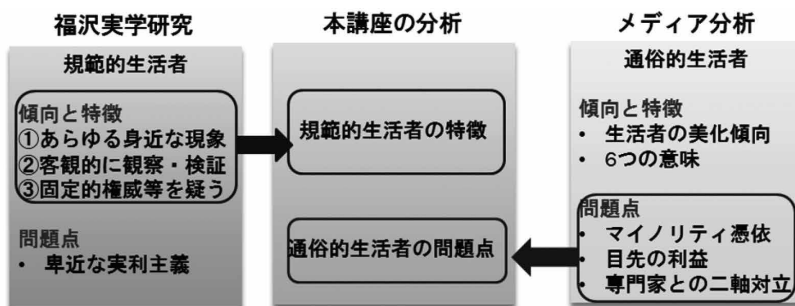


図6 三分析の連関のイメージ

## 参考文献

- ・天野正子『「生活者」とはだれか』中公新書，1996年
- ・お茶の水女子大学生生活科学研究会編『創立130周年記念事業2005年生活科学部・生活社会科学研究会共催シンポジウム生活科学部のゆくえ～家政学から生活科学へ～』お茶の水女子大学生生活科学部生活社会科学研究会，2006年
- ・「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会，1984年
- ・お茶の水女子大学生生活科学部平成6年（1994年）自己点検・評価委員会編『教育・研究の現状と課題：お茶の水女子大学生生活科学部・家政学科家政学研究科』お茶の水女子大学生生活科学部自己点検・評価委員会，1994年
- ・家経史編纂委員会編『家庭経営学科三十年史（お茶の水女子大学家政学部家庭経営学科の記録）1968年～1997年度』家経史編纂委員会，2004年
- ・小泉信三『福沢諭吉』岩波新書，1966年
- ・佐々木俊尚『「当事者」の時代』光文社新書，2012年
- ・杉本勲「近世実学思想史の諸段階とその特色について」岩生成一編『近世の洋学と海外交渉』2-57頁，巖南堂，1979年
- ・東珠実「アメリカ家政学会誌および家族・消費者科学学会誌にみられる総合領域の研究の歴史とその特質」椋山女学園大学生生活科学部生活社会科学科紀要『社会と情報』第10巻第2号，1-11頁，2006年
- ・東珠実・大石美晴・鈴木真由子・吉本敏子・古寺浩・菅原亜子・村尾勇之「アメリカにおける家政学研究の歴史的推移とその特質—学会誌分析（第2報）分析対象論文の年代別・領域別分析」日本家政学会誌 Vol.43 No.11，1077-1085頁，1992年
- ・福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波文庫，1942年
- ・福沢諭吉，伊藤正雄校注『学問のすゝめ』講談社学術文庫，2006年
- ・丸山真男「福沢に於ける「実学」の転回—福沢諭吉の哲学研究序説—」石田雄編『近代日本思想大系2』563-578頁，筑摩書房，1975年
- ・源了圓『実学思想の系譜』講談社学術文庫，1989年
- ・吉本敏子「20世紀のアメリカ家政学の特徴—学会誌分析—」三重大学教育学部研究紀要第54巻人文・社会科学，137-146頁，2003年
- ・吉本敏子・東珠美・大石美晴・鈴木真由子・古寺浩・菅原亜子・村尾勇之「アメリカにおける家政学研究の歴史的推移とその特質—学会誌分析（第一報）分析対象論文の特定」の本家政学会誌 Vol.43 No.11，

1067-1075頁，1992年

## 注

- 1) 例えば、『日本国語辞典』の場合，2000年の第二版では生活者の項目が設けられているのに対し，1972年の第一版にはない。また、『広辞苑』では，2008年の第六版では該当項目があるのに対し，1998年の第五版にはない。
- 2) 丸山真男「福沢に於ける「実学」の転回—福沢諭吉の哲学研究序説—」石田雄編『近代日本思想大系2』563-578頁，筑摩書房，1975年，576頁
- 3) 同上，575頁
- 4) 天野正子『「生活者」とはだれか』（前掲），7頁
- 5) 朝日新聞 1998年8月29日夕刊13頁
- 6) 1958年から総理府（現・内閣府）が行っている「国民生活に関する調査」の調査項目に「お宅の生活の程度は，世間一般からみて，どうですか」という質問がある。「上」「中の上」「中の中」「中の下」「下」という選択肢が用意されている。この「中の上」「中の中」「中の下」の三つの合計が，1970年頃から90%前後に達するようになったことを指して，日本は1970年ぐらいから総中流社会を実現したと言われていいる。（佐々木俊尚『「当事者」の時代』光文社新書，2012年，386頁）
- 7) 内閣府「国民生活に関する世論調査」平成24年度調査（<http://www8.cao.go.jp/survey/h24-life/zh/z29.html>）
- 8) 天野正子『「生活者」とはだれか』（前掲），159頁
- 9) 分析の対象としたのは，1975年，1985年，1995年，2005年，2006年，2007年，2008年，2009年，2010年の9年間，276本の家庭経営学科・生活社会科学講座の卒業論文である。1975年から2005年の40年間については，大まかな傾向を把握するために10年間隔で4年分121本のサンプルをとった。2006年から2010年の5年間については，近年の動向についてより詳しく知るために，5年分155本のサンプルをとった。

## A Study on the new Perspective of “Life”

Eriko MITSUI

The purpose of this study is to reveal a feature of the word “Seikatsu-Sha”, and how should be used in the future. “Seikatsu-Sha” means a person who carries out her or his daily life not only as consumer but also as citizen. More than that, it means a person who has a perspective of any life style with pursuing her or his own way of life and quality of life. In recent years, we often use the word in our daily life. In most cases, it means someone’s eye, like a woman or a customer. However, the meaning of the word is not clear.

To analyze the root of the word, I studied the thought of the pragmatism (jitsu-gaku) that worked out by Fukuzawa Yukichi and to dig out the popular meanings I analyzed a newspaper written from 1870 to 2012. Moreover, I analyzed using about 1201 volumes of graduation thesis written by students of the Department of Social Sciences and Family Studies course in Ochanomizu University, bringing up their students in accordance with its own educational ideas containing “Seikatsu-Sha” and the more.

The major results are as follows.

(1) Generally, Fukuzawa is evaluated that he populated learning among the masses. However, I explained that it is only step to produce the modern "Seikatsu-Sya" and the root of that is just here.

(2) As a result of media analyses, I found that the eye of “Seikatsu-Sha” could be divided into six meanings.

(3) The more a life field expands, the more “Seikatsu-Sha” is diversified, and their eye is not enough to think as "whose eye" only.

These results imply that the eye of “Seikatsu-Sha” originally is not to demand wealthy life from someone but to examine the quality of oneself as the consumer and citizen. However, as a result of improper use of the word, such as to protect one’s own interests, people are disappointed. In the future, it will be required to give an eye to various sides of life. We will have to have both macro sense and micro sense to observe and inspect own life objectively.

